

2018 年度（平成 30 年度）

事 業 報 告 書

— 2019 年 6 月 24 日 —

公益財団法人国際高等研究所

事業報告書

— 目 次 —

[1] 2018年度（平成30年度）事業活動の展開	1
『1』 研究事業活動	1
I. 研究事業の推進	1
II. 受託事業の推進（行政や産業界からの受託研究、共同研究の試行実施）	3
『2』 広報活動	5
『3』 交流事業活動：地域（けいはんな学研都市）から始める事業展開	5
『4』 法人運営活動	7
『5』 資産運用状況	8
[2] 2018年度（平成30年度）財務・収支実績	10
『1』 経常収益の概要	10
『2』 経常費用の概要	10
『3』 最終収支	10
『4』 今後の見通し	11
参考1. 収支構造（資金増減ベース）	12
参考2. 財団保有金融資産の推移と主要収入の推移	13

公益財団法人国際高等研究所 2018 年度（平成 30 年度）事業報告

国際高等研究所においては、2018 年 4 月に松本紘理化学研究所理事長（京都大学第 65 代総長）が、国際高等研究所第 7 代所長に就任し、松本新所長のもと、有本建男副所長（政策研究大学院大学客員教授）、佐和隆光副所長（滋賀大学前学長・京都大学名誉教授）、高見茂副所長（京都光華女子大学副学長・京都大学特任教授）を迎えた新たな研究体制に移行した。

また、2018 年 6 月には、平成 16 年 4 月の就任以来 14 年に亘り理事長を務めた立石 義雄氏（京都商工会議所会頭、オムロン株式会社名誉会長）が退任し、森 詳介理事長（関西経済連合会相談役、関西電力株式会社相談役）が新たに就任し、法人運営新体制が発足した。

2018 年度は、法人運営並びに研究所新体制のもと、中長期的な視野に立った研究計画を策定し、社会にとって望ましい研究所として将来的に安定的な運営を推進するための礎を築く 1 年間とするべく取り組むこととした。これまで 3 年間の成果を基礎として、質の高い活動を維持し、事業活動の実績を社会に示していくことが重要であるとの認識に立ち、新たな基幹プログラムを始動し円滑に立ち上げ運営していくこと、国際的な視点、認知度を向上していくこと、高等研から社会への問い合わせを強化していくために新たな発信を拡大していくこと、高等研の未来に向けた仕込みを実行していくこと、持続的な法人運営のための基盤を構築することなどを目標とした事業計画を策定し、着実な実行に繋いでいくことに努めた。

[1] 2018 年度（平成 30 年度）事業活動の展開

『1』 研究事業活動

2018 年度は新たな研究体制が発足したが、これまでの活動の根底にある目的と精神を受け継ぐこととした。ほぼ全ての研究テーマが 2017 年度を以って終了したことから、これまで 3 年間の研究成果を基盤に、次の中期的（3 年）な新たな研究戦略を立案し、その実行に着手する年度と位置付け取り組んだ。

人間を強く意識し、人々の生活と密接に関わりながら、諸課題に対峙し、世界の英知を結集して研究事業を実施する。事業を展開する中から、学術研究や社会の在り方の問題点と改善案を議論しつつ、新しい方向性を生み出し、新しい概念の創出に寄与することを目指した。

（詳細は、別添「付属明細書 1」参照）

I. 研究事業の推進

1. 総括

現在、人類は持続的生存が脅かされる課題に直面し、生き方や価値観の転換までも問われている。人類の未来と幸福のために、こうした時代的、社会的背景に由来する諸課題にどう対処していくのか。21 世紀にあるべき文化・科学・技術はどのようなものなのか。

2018 年度は、これまでの活動の根底にあるこうした問いを受け継ぎ、人間を強く意識し人々の生活と密接に関わりながら諸課題に対峙し、これから学術研究や社会に適する方向と概念の創出に向け、3 つの基幹プログラムを設置し研究事業を推進した。

また、活動の基盤として、2017 年度以前の基幹プログラムの研究成果を日英版の最終報告書として発行した。

2. 最終報告書の発行

高等研の活動状況及び活動成果を社会に問いかけるため、2015～17 年度に実施した基幹プログラムの最終報告書を下記のとおり発行・公開した。

(1) 国際高等研究所基幹プログラム報告書 A～C (日本語版)

A. 21 世紀地球社会における科学技術のあり方

～近代科学技術の何を持続し何を変えるか、具体的実践は何か～

B. 人類生存の持続可能性～2100 年価値軸の創造～

C. 多様性世界の平和的共生の方策

(2) 国際高等研究所基幹プログラム報告書 A～C (英語版)

英語版総合タイトル : *Shaping the Future beyond Modernity*

A: "Transforming Science and Technology in the 21st Century

- value, system and practice -"

B: "Sustainability of Human Survival - Creation of Value Axis for 2100 -"

C: "Towards Peaceful Co-living in a World of Diversity"

3. 新たな基幹プログラムの設置に向けた取り組み

2015～17 年度の基幹プログラムに係る研究成果を基盤として、さらなる展開を図ることとし、毎月開催する月次会議において、2018～21 年度に係る次の中期的研究戦略を検討し、新規基幹プログラムの立ち上げを図った。

4. 基幹プログラムの始動

2018 年度において以下の基幹プログラムを始動した。

(1) 研究会名 : SDGs 時代における科学技術のあり方—ブダペスト宣言から 20 年

代表者： 有本 建男 国際高等研究所副所長、政策研究大学院大学客員教授

(2) 研究会名 : 第 4 次産業革命への適応—社会経済システムの再編成

代表者： 佐和 隆光 国際高等研究所副所長、

滋賀大学前学長・特別招聘教授、京都大学名誉教授

(3) 研究会名 : けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成(仮)

代表者： 高見 茂 国際高等研究所副所長、京都光華女子大学副学長、

京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

5. 研究プロジェクト

研究プロジェクトは、研究活動について基幹プログラムと両輪となり、相補的充実を図る中で独自性を發揮する事業と位置付けるものである。

2018 年度においては、京都府からの受託研究事業を当該研究プロジェクトとしても位置付け推進した。(当該事業の内容は「II. 受託事業の推進」の項を参照。)

6. 國際會議の企画・実施に向けた取り組み

2018 年度は、高等研主体の國際會議開催に向けた課題を抽出するために、他機関との連携による國際會議を共同開催した。

(1) 理化学研究所との共催會議

會議名 : **Image of Human Being in the Age of Artificial Intelligence**

開催日 : 12 月 15 日～16 日

(2) 国立情報学研究所との共催ワークショップ

會議名 : **Workshop on Graphs and Geometric Algorithms**

開催日 : 12 月 17 日～21 日

7. 他機関との連携、共催活動

(1) 京都スマートシティエキスポ 2018 高等研パネルセッションの開催

京都スマートシティエキspo 2018 が 10 月 4 日（木）～5 日（金）の日程でけいはんなオープンイノベーションセンター(KICK)をメイン会場として開催された。

高等研は当該イベントに併せて、10 月 4 日に同会場においてパネルセッション「未来を拓く国際高等研究所」を開催した。当該セッションでは、松本所長から高等研の歴史や国際性、未来志向かつ基礎的な学術研究、けいはんなからの発信、産業界との連携等の高等研が目指す目標が報告され、続いて各副所長からは現在の研究活動の状況について報告があり、参加者との質疑応答を行った。参加者は 93 名。

(2) 第 10 回「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式・京都環境文化学術フォーラムの開催

国際高等研究所の他、京都府、京都市、京都商工会議所、環境省、総合地球環境学研究所、国立京都国際会館 7 機関で構成される「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会が主催する第 10 回「KYOTO 地球環境の殿堂」の表彰式及び京都環境文化学術フォーラムが、高等研から松本紘所長が出席して、2019 年 2 月 9 日（土）国立京都国際会館メインホールにおいて開催された。

今回は、表彰式に先立ち、第 10 回 KYOTO 地球環境殿堂入りした 3 名(*)の方々と高等研を代表して松本紘所長と佐和隆光副所長が、地球環境問題の解決に向けて共同メッセージ（別紙参照）を発表した。

* 外交官のクリスティアナ・フィグレス前国連気候変動枠組条約事務局長、宗教学者の山折哲雄国際日本文化研究センター名誉教授、環境保全活動家エゴ・レモス氏

II. 受託事業の推進（行政や産業界からの受託研究、共同研究の試行実施）

高等研の追求する持続可能社会の構築といった公益的目的を政策やビジネスの現場においても浸透させ社会を変えていく取り組みの一つとして、行政や企業からの受託研究や共同研究の機会を積極的に開拓し、継続拡大を行っていく。

1. 「日本文化創出を考える」研究会（京都府受託）

2017年9月から着手した「日本文化創出を考える」研究会（研究代表者：西本 清一 京都大学名誉教授）については、京都府からの受託研究事業として行政との連携強化の要でもあることから、2018年度においても引き続き精力的に取り組んだものである。

これまでの研究会を通して、今年度は有形文化財に注力し、日本文化の中心である京都が育んできた長い歴史を活用しながら、日本文化の保護と活用、そして新たな文化の創出について2018年度6回の研究会開催を通じて検討を重ねた。

なお、2018年11月に2025年の大阪・関西万博の開催が決定されたことを受け、万博のコンセプトに日本文化を打ち出すことが謳われていることもあり、本研究会が核となって万博に向けて文化と産業との融合を打ち出していくことが課題に上り、2019年度への継続展開が決定した。

2. 「京都イノベーションベルト構想地域におけるAIに関する研究開発とオープンイノベーションの推進」事業（京都府より地域産業育成産学連携推進事業として受託）

けいはんな学研都市を中心とした京都イノベーションベルト構想地域における産学公民の連携促進や研究開発の深化を図ることを目的として、発展が著しいAIをテーマとするセミナーを毎月開催すると同時に、個別具体的な共同研究を進めた。

第1四半期においては、2017年度に京都府より受託した当該事業の中間報告書を支出内訳書と共に、2018年5月21日（月）を期限として提出した。

第2四半期においては、セミナーを「エジソンの会」（下記『3』の項参照）として実施した。また、本事業の共同研究先である株式会社井上製作所と、同社製品のAIを活用した高度化について議論を進めた。

第3四半期においては、受託事業としての終了期限を迎えるにあたり、セミナーを「エジソンの会」（下記『3』の項参照）として継続して実施すると共に、本事業の共同研究先である株式会社井上製作所と議論を進めてきた同社製品のAIを活用した高度化について論点や今後の展開を整理した。11月21日に実績報告書を提出し、事業を完了した。

3. 共同研究の実施に向けた協議

2017年度にプレリサーチを実施した共同研究先と、2018年度以降の共同研究に関する協議を実施した結果、サントリーホールディングス（株）とは、「酒のもたらす功罪に関する人文社会学面からの研究」を共同で進めることで合意し、正式な共同研究契約書を締結した。

2018年度においては、目標研究に関するフィージビリティスタディを目的とし、目標研究に資する研究者や事例の発掘等を行うこととし、2018年11月1日～2019年3月31日の間、先行文献の発掘、インタビュー、現地調査などの実施を通して、研究者や事例の発掘等を行った。サントリーホールディングス（株）とも定期的な意見交換を行った。

『2』 広報活動

1. 2017年度版アニュアルレポートの取りまとめ

2017年度の研究活動およびその成果に基づき、2017年度版アニュアルレポートを第1四半期中において取りまとめを行い、7月に発行し公表した。

『3』 交流事業活動：地域（けいはんな学研都市）から始める事業展開

1. 「エジソンの会」

2018年度におけるエジソンの会は、原則として毎月1回、定例のオープンセミナーを開催するとの方針を順守して企画・実施した。また、2019年度に繋がる事業展開に係る企画についても検討を進め、第3四半期において2018年度の活動状況を踏まえた2019年度活動計画案について審議・意見交換するため、企画運営委員会を開催した。企画運営委員会及びセミナーは国際高等研究所レクチャーホールにおいて開催した。（詳細は別添「付属明細書2」参照）

（1）企画運営会議：12月12日（水）

参加者：運営委員会16機関、オブザーバー9機関

（2）オープンセミナー

当該セミナーは、原則として毎月1回開催し、年度内11回を重ねた。参加者は延べ453名。1回当たりの平均参加者数は41名。

第20回会合：4月23日（月）

参加者：32機関 45名

第21回会合：5月22日（火）

参加者：35機関 61名

第22回会合：6月26日（火）

参加者：28機関 39名

第23回会合：7月23日（月）

参加者：29機関 42名

第24回会合：8月28日（火）

参加者：28機関 37名

第25回会合：9月28日（金）

参加者：18機関 26名

第26回会合：10月24日（水）

参加者：24機関 34名

第27回会合：12月26日（水）

参加者：28機関 42名

第28回会合：2019年1月23日（水）

参加者：27機関 38名

第29回会合：2019年2月27日（水）

参加者：27機関 50名

第30回会合：2019年3月27日（水）

参加者：35機関 39名

2. IIAS 塾「ジュニアセミナー」（詳細は別添「付属明細書3」参照）

（1）2018年夏季ジュニアセミナー

2018年度夏季ジュニアセミナー（通算第6回）は、8月8日（水）、9日（木）、10日（金）の2泊3日の日程で開催した。「独立自尊の志」養成プログラムの趣旨である言語表現と身体表現の統合による全人教育の一環として天空の響きと銘打って「朗読」による特別授業の時間を設け、2017年夏季セミナーに続き、人間力の基礎の鍛錬に繋げる実践的カリキュラムとした。

受講生の募集対象府県を従来の京都、大阪、奈良の3府県に兵庫、滋賀、和歌山を加えた2府4県に拡大し、各々の各府県教育委員会の後援等の協力を仰ぎながら、多様な参加受講生の確保を図るための広報活動を行った。受講生は、京都府域3校9名、大阪府域2校4名、奈良県域2校10名、滋賀県域1校1名の計24名であった。（内訳は、男子10名、女子14名。また、3年生2名、2年生11名、1年生11名。）

（2）2019年春季ジュニアセミナー開催

2019年度春季ジュニアセミナー（通算第7回）は、2019年3月23日（土）、24日（日）25日（月）の2泊3日の日程で開催した。拡大した募集対象府県に対して受講生の公募を行った結果、応募者多数となり、26名の受講生を決定した。

京都府域4校12名、大阪府域3校5名、奈良県域4校7名、滋賀県域1校2名 計12校26名。（内訳は、男子14名、女子12名。また、2年生18名、1年生8名。）

なお、「独立自尊の志」養成プログラムの趣旨である言語表現と身体表現の統合による全人教育の一環とした特別授業を探究学習として実施し、2018年春季セミナーに続き、アクティブラーニングの手法の下に人間力の基礎の鍛錬に繋げる実践的カリキュラムとした。

（3）けいはんな文化学術教育懇談会

「IIAS塾ジュニアセミナー」のこれまでの開催経過等を振り返りながら、「独立自尊の志」を有する「全人」の輩出を願いつつ、関西の若者の教育力の涵養、あるいは日本の未来を担う人物の輩出の在り方などについて意見交換するために、「けいはんな文化学術教育懇談会」の2017年度に引き続き8月23日（木）にキャンパスプラザ京都にて開催した。

3. 「ゲーテの会」

2018年度のゲーテの会は、2017年度に引き続き日本の「未来社会」を拓くことに視点を置いて、「未来に向かう英知を探る：時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか」を主テーマとして展開した。

本年度では、従来通りの定例会を11回、特別企画を1回開催し、延べ433名の参加者を得た。1回当たりの平均参加者数は36名。（詳細は別添「付属明細書3」参照）

第58回：4月27日（金）於国際高等研究所コミュニティーホール

参加者：36名

第 59 回：5 月 29 日（火）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：40 名

第 60 回：6 月 28 日（木）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：38 名

第 61 回：7 月 27 日（金）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：31 名

第 62 回：8 月 27 日（月）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：36 名

第 64 回：10 月 23 日（火）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：33 名

第 65 回：11 月 22 日（木）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：20 名

第 66 回：12 月 21 日（金）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：24 名

第 67 回：2019 年 1 月 24 日（木）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：33 名

第 68 回：2 月 20 日（水）於国際高等研究所コミュニティホール
参加者：38 名

第 69 回特別企画：3 月 19 日（火）於国際高等研究所レクチャーホール
参加者：66 名

『4』 法人運営活動

1. 戦略会議（ISC）活動の展開

第 2 期戦略会議 ISC は、2017 年度に委員の拡充を行い、2018 年度において引き続き「人文社会系の学と社会との乖離」及び「新たな研究ドメインとプロセスの確立」について検討することとした。

今年度における取り組むべき課題の方向性について、村上議長との協議を行う等諸準備を行い、年度内 3 回の会合を開催し、年度末に最終報告書の取りまとめを行った。

第 1 回会合：7 月 2 日（月）於国際高等研究所

第 2 回会合：12 月 18 日（水）於国際高等研究所

第 3 回会合：2019 年 3 月 7 日（木）於学士会館（東京神田）

2. 中長期財務運営戦略策定に向けた取り組み

2017 年度に中長期財務運営戦略を構築するために設置した「経営基盤委員会」において理事長から諮問のあった「高等研の中長期財政健全化への取り組み策」について、当該委員会として集中して審議を行い、提言がまとめられた。

本提言については、高等研にとって今後の具体的な持続可能な財務運営及び経営戦略に資するものであるとして、第 105 回理事会（5 月 25 日開催）及び第 78 回評議員会（6 月 12 日開催）において承認を得た。

経営基盤委員会：5 月 14 日（月）於ホテルグランヴィア京都

3. 諸規則・規程類の改訂・制定

経営基盤委員会提言に示された「資産運用規程の検討のポイント」を踏まえ、資産運用の改善を図るための指針となる規程類である「資産運用規程」を改訂するとともに、「資産運用基準」を制定した。(2018年9月21日)また、施設の有効活用による施設利用料の見直しを図るため「施設利用規程」を改訂し、新料金体系に基づく利用料の徴収を2019年1月に開始した。

『5』資産運用状況

2018年度における財務活動として、債券の満期償還あるいは発行元都合による期日前償還によって得られた資金を原資として再運用を図る資産運用状況は、下記のとおりである。

再運用については、理事長、専務理事及び理事長の指名する役職員（法人運用部門統括及び総務部長）により構成する資産運用委員会の審議を経て行うものである。

1. 第44回資産運用委員会：4月11日（水）

2018年3月26日付クレディセイシスAGコーラブル債（1.5億円）期日前償還に伴う再運用（2億円）を審議し、下記のとおり実行した。

購入債券

銘柄	購入日	満期日	購入金額 (千円)	元本 (千円)
トライ銀行 ユーロ債	2018/4/26	2048/4/27	100,000	100,000
BNPパリバ銀行円 貨建クレジットリソク債	2018/5/9	2028/6/22	100,000	100,000
計			200,000	200,000

2. 第45回資産運用委員会：9月27日（木）

2018年9月20日付第11回日本政策投資銀行債（1億円）満期償還に伴う再運用を審議し、下記のとおり実行した。

購入債券

銘柄	購入日	満期日	購入金額 (千円)	元本 (千円)
ユーロ円建 コーラブル債	2018/10/16	2038/10/15	100,000	100,000

3. 第46回資産運用委員会：2月15日（金）

2019年2月15日付「基本財産運用の基本方針」を審議し、決定した。

基本財産運用の基本方針

1) 運用対象

①2018年度から2023年度に満期償還となる債券：9銘柄、約9億円

②利回りの低い（1.4%/年以下）債券：6銘柄、約8億円

2) 運用方法

以下の3種の方法に概ね均等に資金を投入し運用する。

- ①為替リスクを有するものの高利回りが期待できる仕組債
- ②為替以外のリスクを有するものの高利回りが期待できる仕組債
- ③株式

4. 第47回資産運用委員会：2月28日（木）

- (1) 2019年3月25日付平成20年度第6回京都府公債（2億円）満期償還に伴う再運用を審議し、下記のとおり実行した。

購入債券

銘柄	購入日	満期日	購入金額 (千円)	元本 (千円)
ユーロ円建 コラブル債	2019/3/26	2049/3/25	200,000	200,000

- (2) 2019年度（2019年4月～2020年3月）中に満期償還を迎える下記2件の公債について、再運用として個別株式4銘柄を同年度に購入することを審議し、決定した。

満期償還予定債券

- ・第329回大阪府公債

（2019年8月28日満期償還予定）額面1億円

- ・第334回大阪府公債

（2020年1月28日満期償還予定）額面1億円

購入予定株式銘柄

銘柄	購入日	購入金額(千円)
KDDI株式	2019年4月～2020年3月 （「るいとう」による毎月定額購入）	総額 47,520
NTT株式	2019年4月～2020年3月 （「るいとう」による毎月定額購入）	総額 47,520
JT株式	2019年4月～2020年3月 （「るいとう」による毎月定額購入）	総額 47,520
日本郵政株式	2019年4月～2020年3月 （「るいとう」による毎月定額購入）	総額 47,520

* 「るいとう」：株式累積投資

株式累積投資とは、毎月定額で株式を購入する投資方法のことで、通称「るいとう」とも呼ばれる。1銘柄につき月々1万円以上1,000円単位の一定額（上限100万円未満）で同一株を買い付けることから、株式を積み立て方式で買うイメージ。このため、通常の単元株取引では多額の資金が必要になる銘柄でも、株式累積投資を利用すれば少額の資金で株式を購入することができる。

[2] 2018年度（平成30年度）財務・収支実績

『1』 経常収益の概要

運用益については、「経営基盤委員会」の提言を踏まえて「資産運用規程」を改訂し、一定のリスクに配慮した積極的な運用を実施したことに加え、為替相場が比較的に安定して推移したことにより、基本財産受取利息では予算比465万1千円増の5,011万1千円、受取配当金では㈱ワコールホールディングスの配当が見込を上回ったことなどにより予算比359万9千円増の944万2千円となり、合計5,955万4千円となった。

受取補助金等は、受取国庫補助金が、文部科学省からの科学研究費補助金（特定奨励費）について、2018年度から3年間の特定奨励費申請事業が不採択となったため収入なしとなったが、京都府と同外郭団体からの補助金を受取地方公共団体補助金と受取民間補助金にそれぞれ計上したため、受取補助金等合計で予算比900万円減の600万円となった。

雑収益については、交流活動「けいはんなゲーテの会」および「エジソンの会」の参加費や施設利用料収入などを計上しているが、このうち企業からの共同研究費用の分担金等が見込を下回ったこと等により、予算比1,102万6千円減の2,866万円となった。

なお、経常費用を賄うための収入不足を補填するため、研究事業推進基金を取り崩して受取寄付金等振替額として計上しているが、同振替額は5,212万4千円となり、これを含めた経常収益の合計は、1億4,633万円9千円となり予算比で746万1千円の減少、前年度決算比では332万2千円の増加となった。

『2』 経常費用の概要

経常費用のうち事業費は、研究事業に直接要する費用に、全体の管理に要する費用から研究事業に寄与する部分を配賦計算に基づき按分した金額を加えて事業費としている。従って、管理費は全体の管理に要する費用のうち、事業費に按分した残りを管理費として計上している。

うち、事業費では、会議費、旅費交通費、広告宣伝費が見込みを下回ったため、事業費の合計は予算比で820万2千円減の1億7,339万1千円となった。また、前年度決算比では226万3千円の増加となった。

管理費については、消耗什器備品費等が見込みを上回ったため、管理費合計は予算比で47万円増の1,747万8千円となった。また、前年度決算比では112万7千円の増加となった。

この結果、経常費用の合計は、1億9,086万9千円となり、予算比で773万2千円の減少、前年度決算比では339万円の増加となった。

『3』 最終収支

年間収支を相償うため研究事業推進基金を取り崩して収入に補填する受取寄付金等振替額は、予算に比べ431万3千円増の5,212万4千円となり、前年度決算比では1,231万6千円の増加となった。

この結果、2018年度の一般正味財産増減額は、4,453万円の減少である。予算では4,480万1千円の減少であったので、予算比で減少幅が27万1千円縮小し、前年度決算比で減少幅が6万8千円の増加となった。また、基本財産と研究事業推進基金の増減を表す指定正

味財産増減額は、6,092万1千円の増加で、増加額が予算比では1億998万2千円増加し、前年度決算比で7,989万5千円増加したことになる。

以上の増減額をあわせた正味財産期末残高は、48億2,221万2千円となり、予算比で1億1,025万4千円の増加、前年度決算比では1,639万1千円の増加となった。これは、基本財産のうち3,000万円を研究事業推進基金に振り替えたこと等による減少と、投資有価証券のうち満期保有目的債券をその他有価証券に区分変更したこと等による評価増に加え、施設等の減価償却費計上を合せたものである。

『4』今後の見通し

2019年度においても、経常費用を賄うための収入不足の補填に加え、研究棟他空調設備工事の工事資金の一部に充当するために研究事業推進基金を取崩す予定である。2018年度期末時点での研究事業推進基金残高1,769万円に、2019年度の基本財産から研究事業推進基金への振替予定額1億円を加え、同じく2019年度の研究事業推進基金から経常収益への振替額(取崩予定額)9,761万3千円を差し引いた期末時点での研究事業推進基金の残高は、2,007万7千円になる見込みである。

しかしながら今後、経済情勢の変化を含む不測の事情が発生した場合には、必要に応じて理事会ならびに評議員会において本財産を取り崩して研究事業推進基金に振替ることについての審議を改めて求めることとする。

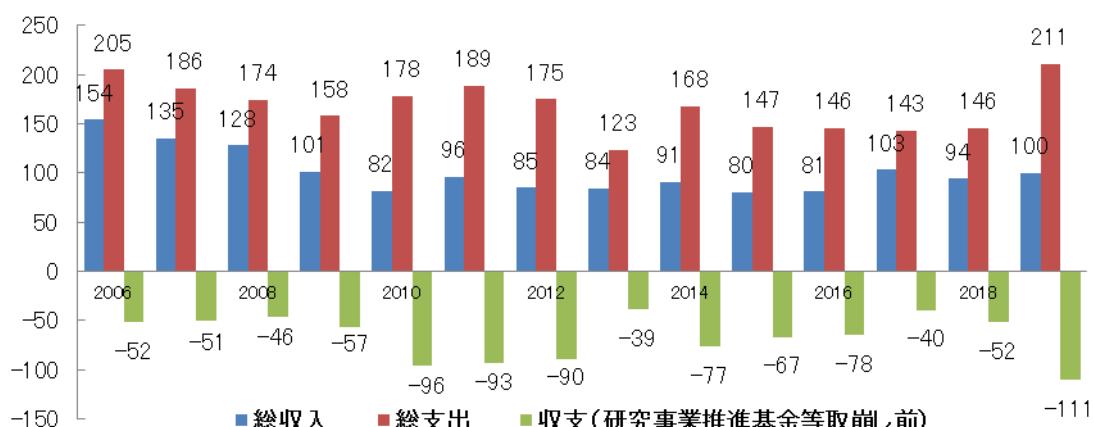
2020年度以降の財政計画については、「経営基盤委員会」の提言を踏まえ、社会に認められ、必要とされる事業展開を充実強化することで、收支相償に向けた抜本的な取り組みをさらに進めて行くこととする。

以上

参考1. 収支構造（資金増減ベース）

- ・収支のマイナスギャップは、過去2004年度から継続。
- ・安全性最重視の資金運用シフトにより、利息収入が低迷する中、支出の抑制に努めるも、研究事業推進基金の取崩による事業運営が継続。
- ・2019年度は、収支差1億1,084万3千円の計上を見込む。
(同年収支には研究棟他空調設備工事資金6,165万円および修繕積立金取崩1,323万円を含む)

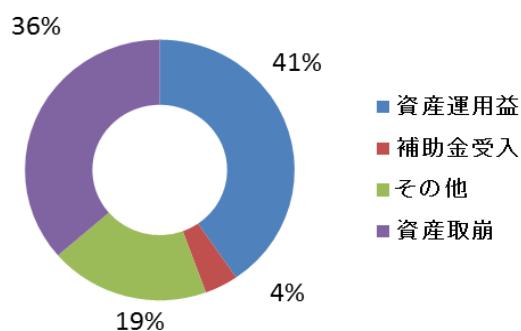
高等研 収支実績推移（単位：百万円）



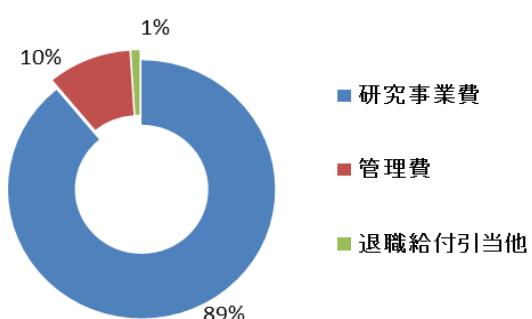
参考2. 財団保有金融資産の推移と主要収入の推移

- ・収支構造としては、事業費支出（89%）と管理費支出（10%）が支出の大半を占めている。また、調達としては資産運用益（41%）と補助金（4%）のほか、36%は資産取崩によって支えられている財務構造にある。

調達構成比



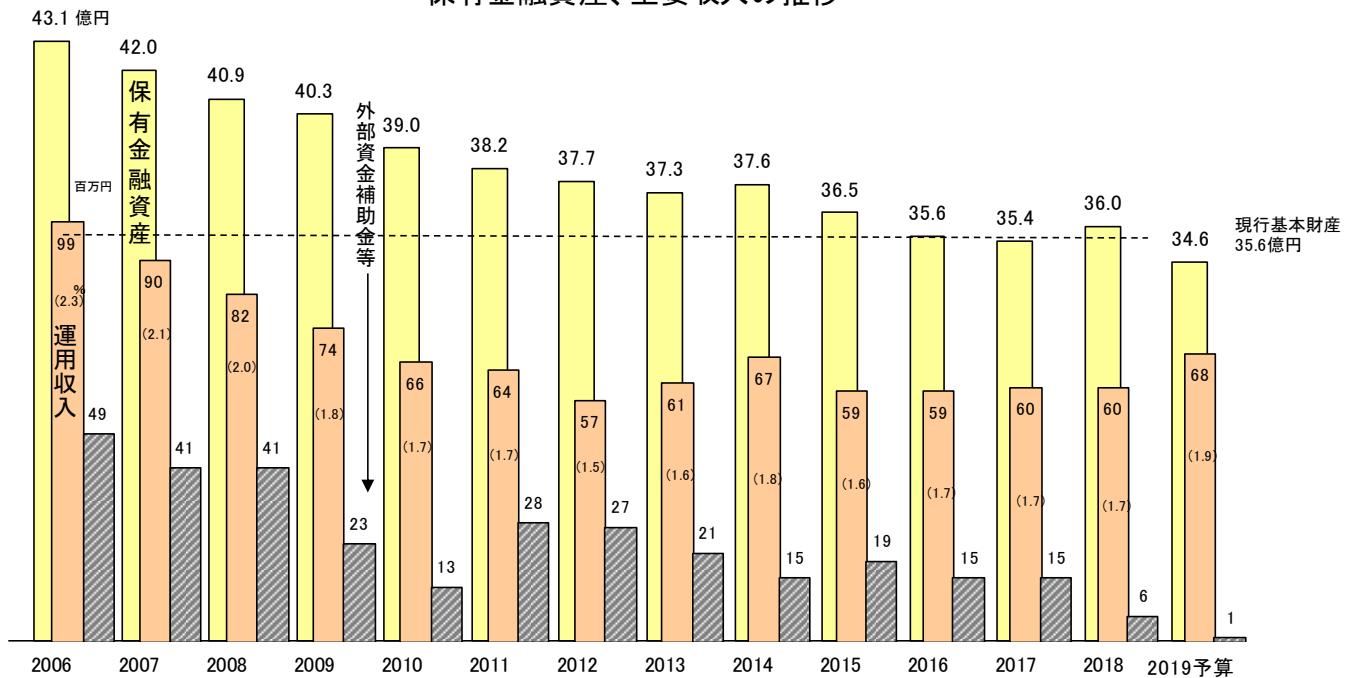
構成比



低金利状況が続く中、「資産運用基準」に則り収入の確保に努めているが、かつては利回り率4.1%（2003年度）であった運用も、安全性を配慮した運用の結果、2018年度の利回り率は1.7%の水準となり、運用収入は長期的に減少傾向が続いている。

現在保有している金融資産は36億円であるが、この内、取崩可能な研究事業推進基金は1,769万円である。なお、2019年3月の評議員会において基本財産より研究事業推進基金へ7,000万円の振替を実施することについて承認決議がなされている。

保有金融資産、主要収入の推移



(2018 年度末に満期保有目的債券をその他有価証券に区分変更し、時価評価に変更)

注 運用方針

格付機関：「BBB+」以上の評価のものとする。又、現状の保有 26 債券のうち、海外債券は 10 件、残る 16 件は国債、地方債、社債、仕組債等の国内債券に投資。

付属明細書 1

公益財団法人国際高等研究所
2018 年度（平成 30 年度）事業活動の展開
研究事業活動
「研究事業の推進」

目 次

1. 研究企画推進会議	2
2. 新たな基幹プログラムの設置に向けた取り組み—月次会議の開催	2
3. 基幹プログラムの設置・始動	3
(1) 「SDGs 時代における科学技術のあり方—ブダペスト宣言から 20 年—」	
(2) 「第 4 次産業革命への適応—社会経済システムの再編成—」	
(3) 「けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成(仮)」	
4. 研究プロジェクト	5
(1) 「日本文化創出を考える」研究会	
5. 国際会議の企画・実施	6
(1) 理化学研究所との共催国際会議	
(2) 国立情報学研究所（NII）との共催ワークショップ	

1. 研究企画推進会議

研究企画推進会議は、高等研における研究事業の企画及び円滑な推進を図るため、所長の諮問機関として、以下の目的を以って設置された。

- ・研究所の研究活動に係る諸課題に関する所長の諮問に応じた検討、所長への建議あるいは助言・提案
- ・その他研究事業の企画及び円滑な推進を図るために必要な事項

(1) 委員構成

研究企画推進会議の委員は、任期が 2017 年 4 月 1 日から 2 年間。なお、2017 年 4 月 1 日付けにおいて 12 名構成であったが、高見茂委員は 2018 年 4 月 1 日付けにて副所長に就任したことから、委員を退任した。

議長	榎 裕之	豊田工業大学学長、東京大学名誉教授
委員	石田 英敬	東京大学大学院情報学環教授・同大学院総合文化研究科教授
	小泉 潤二	人間文化研究機構監事、大阪大学名誉教授
	佐伯 啓思	京都大学こころの未来研究センター特任教授、京都大学名誉教授
	島岡 まな	大阪大学大学院高等司法研究科教授
	中村 道治	科学技術振興機構顧問
	西尾章治郎	大阪大学総長
	西村いくこ	甲南大学理学部教授、日本学術振興会学術システム研究センター副所長、京都大学名誉教授
	西本 清一	京都高度技術研究所理事長、京都市産業技術研究所理事長、京都大学名誉教授
	広井 良典	京都大学こころの未来研究センター教授
	廣岡 博之	京都大学大学院農学研究科教授

以上 11 名

(2) 活動状況

2018 年度においては研究企画推進会議を開催せず、個別事案について委員に相談・協議した。

2. 新たな基幹プログラムの設置に向けた取り組み—月次会議の開催

原則として毎月 1 回正副所長及び事務スタッフによる月次会議を開催し、広く今後の研究事業を中心とする事業の企画及び展開のあり方について検討した。

特に 2017 年度末において終了した基幹プログラムに代わる新規基幹プログラムの具体的な内容、及び進め方について検討し、2018 年度中の立ち上げを図った。

於国際高等研究所

第 1 回月次会議	4 月 7 日（土）
第 2 回月次会議	5 月 20 日（日）
第 3 回月次会議	6 月 24 日（日）
第 4 回月次会議	7 月 22 日（日）
第 5 回月次会議	9 月 16 日（日）

第6回月次会議 10月21日（日）
第7回月次会議 11月24日（土）
第8回月次会議 12月16日（日）開催中止
第9回月次会議 2019年1月13日（日）
第10回月次会議 2月24日（日）
第11回月次会議 3月31日（日）

3. 基幹プログラムの設置・始動

2018年度上半期において、2018年度から3年間に亘る中期研究戦略の策定に向けた検討を月次会議に併せて行った。課題探索の結果として新たな基幹プログラムとして具体的に取り上げるべき研究課題・テーマを確定させ、事業化を図った。

（1）「SDGs時代における科学技術のあり方—ブダペスト宣言から20年—」

1) 目的

21世紀に入り、今後の科学技術のあり方、社会経済と人々との関係について、目指す価値、政策、研究の方法、教育、ファンディング、大学マネジメント等の改革が迫られている。本研究では、科学技術と社会との新しい契約・責務・実践において重要なSTI for SDGs（SDGs目標解決に向けた科学技術の役割）の枠組みと、各国の科学技術政策の思想的基盤となっているブダペスト宣言（21世紀の科学と科学の使用に関する世界宣言）に焦点を当て、科学技術のあり方、科学者コミュニティの役割と責任、思想的基盤、異分野融合型研究体制のデザインについて検討し、内外に活動のネットワークを広げる。

2) 研究組織

有本 建男 国際高等研究所副所長、政策研究大学院大学客員教授【研究代表者】
大竹 晓 科学技術振興機構研究開発戦略センター客員フェロー、
東京大学政策ビジョン研究センター客員教授（幹事）
駒井 章治 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授（幹事）
宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授（幹事）
隠岐 さや香 名古屋大学大学院経済学研究科教授
狩野 光伸 岡山大学副理事・大学院医歯薬学総合研究科副研究科長・教授
小寺 秀俊 理化学研究所理事

3) 研究会開催

第1回準備会： 4月23日（月）於国際高等研究所
第2回準備会： 7月2日（月）於科学技術振興機構
第3回準備会： 10月15日（月）於京都私学会館
第1回研究会： 10月19日（金）於科学技術振興機構
第2回研究会： 2019年1月9日（水）於京都私学会館
第3回研究会： 2月25日（月）於科学技術振興機構

その他の活動：

- 11月6日(火)～7日(水)「政府に対する科学的助言に関する国際ネットワーク
(International Network for Government Science Advice: INGSA)」第3回会合
於政策研究大学院大学／協賛
- 12月22日(土)「日本学術会議 in 京都『伝統文化と科学・学術の新たな出会い』」
第三部产学良縁創出企画
於京都府立大学／日本学術会議、京都大学、京都府立大学、京都産業大学と共に

(2) 「第4次産業革命への適応—社会経済システムの再編成—」

1) 目的

現在進行中の第4次産業革命は、経済社会に根源的な変容を迫りつつある。深刻な雇用問題、IoPとIoT（ヒトとモノのインターネット）の進展、限界費用ゼロ社会の到来、シェア・エコノミーの進展等の経済社会の変容は堰き止め難い潮流であり、それへの適切な適応が求められる。また、新しい社会経済を読み解くためには、工業化社会を前提に据える既成経済学のパラダイム・シフトが求められている。本研究では、このような設問に答え、経済学のパラダイム・シフトの方向を見究め、その成果を様々なメディアを通じて世に問う。

2) 研究組織

佐和 隆光	国際高等研究所副所長、滋賀大学特別招聘教授【研究代表者】
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科教授
大西 宏一郎	早稲田大学教育・総合科学学術院准教授
佐々木 典士	作家、編集者
下村 研一	神戸大学経済経営研究所教授
新海 哲哉	関西学院大学経済学研究科教授
二神 孝一	大阪大学大学院経済学研究科教授
宮脇 正晴	立命館大学法学研究科教授
若森 直樹	東京大学大学院経済学研究科講師

3) 研究会開催

於国際高等研究所

- 第1回研究会： 6月29日(金)
第2回研究会： 8月2日(木)
第3回研究会： 9月14日(金)
第4回研究会： 10月26日(金)
第5回研究会： 11月30日(金)
第6回研究会： 2019年1月25日(金)
第7回研究会： 3月12日(火)

(3) 「けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成(仮)」

1) 目的

けいはんな学研都市は、街びらきから30余年の間に、140を超える研究機関や大学、文化施設が設置され、生活者も増加した。これから30年のこの街のあるべき姿を描くとき、教育は重要な軸であろう。本研究では、けいはんなに蓄積されたリソース、関西の地に備わる歴史や文化を生かし、世界規模での活動が増えつつあるこの時代に「国際教育都市としてのけいはんな」の可能性を探り、けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成の実現に向けた活動を行う。

2) 研究組織

高見 茂	国際高等研究所副所長、京都光華女子大学学長、 京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授【研究代表者】
郭 晓博	神戸松蔭女子学院大学教育学部講師
白銀 研五	びわこ学院大学教育福祉学部講師
杉本 均	京都大学大学院教育学研究科教授
全 京和	京都光華女子大学健康科学部健康栄養学科講師
谷本 寛文	京都光華女子大学子ども教育学部准教授
智原 江美	京都光華女子大学子ども教育学部教授
中島 悠介	大阪大谷大学教育学部講師
長久 善樹	啓明学院教員
南部 広孝	京都大学大学院教育学研究科教授
西川 潤	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程
服部 憲児	京都大学大学院教育学研究科准教授
松本 圭将	京都大学大学院教育学研究科修士課程
宮村 裕子	畿央大学教育学部准教授
廖 于晴	京都大学地域連携推進ユニット特任助教
渡辺 雅幸	びわこ学院大学教育福祉学部講師

3) 研究会開催

第1回研究会： 12月22日（土）於京都大学

4. 研究プロジェクト

(1) 「日本文化創出を考える」研究会

1) 目的

2017年9月から着手した「日本文化創出を考える」研究会（研究代表者：西本 清一京都大学名誉教授）については、京都府からの受託研究事業として行政との連携強化の要でもあることから、2018年度においても引き続き精力的に取り組むこととした。

2) 研究組織

西本 清一	京都高度技術研究所理事長、京都市産業技術研究所理事長、 京都大学名誉教授【研究代表者】
内田由紀子	京都大学こころの未来研究センター准教授

熊谷 誠慈 京都大学こころの未来研究センター特定准教授
高橋 義人 平安女学院大学特任教授、京都大学名誉教授
徳丸 吉彦 聖徳大学教授、京都市立芸術大学客員教授、お茶の水女子大学名誉教授
長尾 真 国際高等研究所学術参与、京都大学名誉教授

3) 活動状況

これまでの研究会を通して、今年度は有形文化財に注力し、その中でも日本文化の中心である京都が育んできた長い歴史を活用する、あるいは諸外国から見て日本の特徴を打ち出すことが出来るという視点から、「竹」に着目することとした。そして、「竹」を通して、日本文化の保護と活用、新たな文化と産業の創出について、東京オリンピックや大阪万博などの機会を活用した成果の発信を意識しながら、けいはんな学研都市の関係機関等と議論を行った。また、第三四半期中に 2025 年の大阪・関西万博の開催が決定されたことから、万博のコンセプトに日本文化を打ち出すことが謳われていることもあり、本研究会が核となり万博に向けて「オールけいはんな」、「オール京都」による文化と産業との融合を打ち出していく議論も行った。

第1回研究会（通算第5回）：5月15日（火）於国際高等研究所

第2回研究会（通算第6回）：7月24日（火）於京都市産業技術研究所

第3回研究会（通算第7回）：9月7日（金）於国際高等研究所

第4回研究会（通算第8回）：11月20日（金）於京都市産業技術研究所

第5回研究会（通算第9回）：2019年1月29日（火）於国際高等研究所

第6回研究会（通算第10回）：3月1日（金）於国際高等研究所

5. 国際会議の企画・実施

2018 年度は、高等研主体の国際会議開催に向けた課題を抽出するために、他機関との連携による会議を開催した。

（1）理化学研究所との共催国際会議

理化学研究所との連携に基づく国際会議「AI 技術文明時代の人間像」を 12 月 15 日～16 日の日程により企画・開催した。

国際会議の概要

テーマ：AI 技術文明時代の人間像

趣旨：人工知能（AI）をはじめとする情報通信技術（ICT）の急速な発展により、社会は大きな変化を遂げつつある。新しい技術がもたらす未来への期待と不安が混在する現代、私たち人間の生き方が改めて問われている。AI 技術文明を築きつつある中で、技術を賢く利活用するための技能や智恵を私たちはどのように磨き、また継承していく、これらを通じてどのような社会を形成していくことが期待されるか。「AI 技術文明の時代の人間像」をテーマとして、法律、経済、社会、教育、人類学など多角的な観点から取り上げる。

参加者：国内外の研究者及び一般約 60 名

(2) 国立情報学研究所（NII）との共催ワークショップ

国立情報学研究所（NII）と連携を図りながら当該研究所の国際会議のスキームを活用し、NII との協力の下での国際会議を 12 月 17 日～21 日の 4 泊 5 日の日程で共同開催した。

国際会議の概要

会議名：Workshop On Graphs and Geometric Algorithms (WOGGA)

参加者：国内外の研究者約 10 名

以上

付属明細書 2

公益財団法人国際高等研究所 2018 年度（平成 30 年度）事業活動の展開 交流事業活動 「エジソンの会」

1. 「エジソンの会」の企画開催

エジソンの会は、けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するために、高等研が知的ハブとしての役割を果たし、立地機関の研究者や技術者のコミュニティーを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与することを目的として発足したものである。

2018 年度も昨年度に引き続きオープン・セミナーの開催を重点的に事業展開した。

[1] 「エジソンの会」を企画・運営する「企画委員会」及び「オブザーバー」の機関構成 【企画運営委員会】

国立研究開発法人理化学研究所
国立研究開発法人産業技術総合研究所
国立研究開発法人情報通信研究機構ユニバーサルコミュニケーション研究所
国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学
国立大学法人滋賀大学
京都情報大学院大学
西日本電信電話株式会社
サントリーホールディングス株式会社
パナソニック株式会社
株式会社島津製作所
京セラ株式会社
オムロン株式会社
株式会社国際電気通信基礎技術研究所
国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構
日本電産株式会社
公益財団法人国際高等研究所

(順不同、16 機関)

【オブザーバー】

京都府
奈良県
木津川市
奈良市
精華町
国立国会図書館
公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構
公益社団法人関西経済連合会
公益財団法人京都産業 21

(順不同、9 機関)

企画運営会議：12月12日（水）於国際高等研究所レクチャーホール

内容 ○2018年度の取り組み状況についての報告

○会合・個別共同研究の今後の進め方に関する議論 など

参加者 運営委員会（16機関）オブザーバー（9機関）

[2] 「オープン・セミナー」

第20回会合：4月23日（月）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「AIの進化に伴う人文社会系の問題を考える」

～雇用/働き方/人材育成の観点から～

AIはロボットやIoTなどとともに、科学技術全体の指數関数的な進化を牽引するといわれています。それらのもたらす大きな変化はシンギュラリティ（※1）論争に代表されるような人と機械の関係性の変革のみならず、仕事との向き合い方や職業の変化、新たなデジタルディバイド（※2）のリスク、プライバシーやヒューマニティに係るリスクなど、これまでにない社会的課題やリスクを生み出してしまうことが懸念されています。今後新たに噴出してくる課題にはどのようなものがあるのか、来るべきAIネットワークの時代に、それらの恩恵を最大限享受しながらも、安寧で安定した社会を築いていくためにはどうしたらよいのかについて、理解を深めるとともに考究して行きます。

※1：シンギュラリティとは、未来学者のレイ・カーツワイル氏が提唱したもので、「人工知能（AI）の知性（性能）が地球上の全人類の知性を超える時点」を指す。

※2：デジタル・ディバイドとは、情報格差のことで、インターネット等の情報通信技術（ICT）を利用できる者と利用できない者との間にもたらされる格差のこと。

講演：「人工知能AI時代の『雇用の未来』『働き方・人材育成』」

講師：岩本 晃一 独立行政法人経済産業研究所上席研究員

講演：「AI時代の教育－意志ある学び プロジェクト学習

～インテリジェント化で知の共有・知の成果をかなえる～

講師：鈴木 敏恵 シンクタンク未来教育ビジョン代表・一級建築士

2018年度における推進体制について

松本 紘 国際高等研究所所長

上田 修功 理化学研究所革新知能統合研究センター副センター長

「エジソンの会」スーパーバイザー

インターラクティブ・セッション

参加者：32機関 45名

第21回会合：5月22日（火）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「画像センシングの現状と未来」

昨今のAIの進展は、コンピューティングパワーの劇的な拡大により支えられていますが、マシンが人間の五感の内、とくに視覚を持つようになったことが、AIの大きな進化に繋がったとも言われています。これまで、システムは、その入力となる現実世界の変数を人間の手で取り出していましたが、画像データから適切な特徴

量を自動的に導き出し、驚異的な画像認識の精度を実現することが可能となっていました。そこで使われた技術が深層学習であり、これまでの機械学習ではできなかった革新的なアルゴリズムとして認識され、今日の画像センシングの高度化を支えています。画像認識における先端技術とそこでの深層学習の今後の展望に触れていただくことによって、AIを中心とした新たなテクノロジーがどのように活かされ、産業や社会を如何に革新していくのかについて、理解を深めるとともに考究して行きます。

講演：「画像認識・処理のための深層学習の研究の最新動向と今後」

講師：岡谷 貴之 東北大学大学院情報科学研究科教授

理化学研究所 革新知能統合研究センターチーム長

講演：「人の眼を超えた先端イメージセンシング

～人工知能との組み合わせで万能センサの夢に近づく～」

講師：島田啓一郎 ソニー株式会社執行役員

コーポレートエグゼクティブ

インタラクティブ・セッション

参加者：35 機関 61 名

第 22 回会合：6 月 26 日（火）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「マルチモーダル・クロスモーダル 人の五感情報の統合

～相互作用の仕組みと応用について～」

私たちは、日常生活において、五感の感覚器官を通して外の世界を認識しています。五感の内、複数の感覚を用いて対象を認識しようとするのをマルチモーダルな情報処理といいます。また、ある感覚の情報から他の感覚の情報を補完して認知、解釈することをクロスモーダルな情報処理といいます。人間の認知メカニズムを明らかにし、人間の持つマルチモーダルやクロスモーダルな特性を理解して、機械と人間のコミュニケーションを違和感なく、自然に、円滑に、且つ快適で心地良くすることで、どのような可能性が拓けるのか、人の認知メカニズムの研究とそれらを利用した様々な分野への応用の可能性について、理解を深めるとともに考究して行きます。

講演：「人の多感情報からの相互作用の仕組みとその応用」

講師：安藤 広志 情報通信研究機構（NICT）脳情報通信融合研究センター
脳機能解析研究室副室長

講演：「感覚間の相互作用を利用したバーチャルリアリティの技術とその可能性」

講師：鳴海 拓志 東京大学大学院情報理工学系研究科
知能機械情報学専攻講師

インタラクティブ・セッション

参加者：28 機関 39 名

第 23 回会合：7月 23 日（月）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「AI の進化に伴う人文社会系の問題を考える

～知的財産権の観点から～」

コンピューティングパワーの劇的な拡大、センシング技術の向上、深層学習の進化など科学技術全体の指數関数的な進展により、人工知能は、我々の生活や社会に新たな付加価値や質の向上がもたらし、今後ますます大きな影響を与えるものと思われます。人工知能は、新たなイノベーションの創出と産業競争力強化の観点からも大きな期待が寄せられており、幅広い産業への普及と未来の産業構造に向けての新たな価値創出への取り組みが行われています。国境を越えてデータが行き交うデジタルネットワーク時代を迎え、AI の創作物や、創作性の認めにくいデータベースなどの新たな情報財についての知財保護の必要性や在り方について、理解を深めるとともに考究して行きます。

講演：「人工知能&機械学習と知的財産権

～平成 30 年著作権法改正による機械学習パラダイスとしての日本～」

講師：上野 達弘 早稲田大学法学学術院 教授

講演：「AI 時代における産業分野の知的財産権

～第4次産業革命に向けた知的財産制度への対応～」

講師：亀井 正博 一般財団法人ソフトウェア情報センター(SOFTIC)専務理事

インタラクティブ・セッション

参加者：29 機関 42 名

第 24 回会合：8月 28 日（火）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「エネルギーハーベスティング～発電と充電のテクノロジー～」

エネルギーハーベスティングのハーベストとは「収穫」を意味し、身の回りにある熱や振動や電波など環境中に存在する様々な形態の微弱なエネルギーを得て、電気エネルギーに変換蓄積する技術です。あらゆるもののがネットワークにつながる IoT 時代においては、電源供給が不可能な環境にあるデバイスをどのようにして長期間作動させ続けるかが重要な課題となってきています。エネルギーハーベスティングについての最新技術や動向を学ぶとともに、先進事例や今後の展望に触れて頂くことによって、我々を取り巻く社会や環境がどのように進化していくのか、理解を深めるとともに考究して行きます。

講演：「エネルギーハーベスティングを支える最新技術」

講師：桑野 博喜 東北大学未来科学技術共同研究センター 教授

講演：「エネルギーハーベスティングの最新実用化動向」

講師：竹内 敬治 株式会社 NTT データ経営研究所 社会・環境戦略コンサルティングユニット シニアマネージャー

インタラクティブ・セッション

参加者数：28 機関 37 名

第 25 回会合：9月 28 日（金）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「アディティブ・マニュファクチャリング

～3 次元造形技術によるものづくり革命～」

アディティブ・マニュファクチャリングは、積層造形による新しい製造技術です。従来の樹脂を中心とした3Dプリンティング技術から、さらに大きく進展して強靭で高度な機能性を持つ金属部品の製作も可能となっており、今、開発・設計者は様々な制約から解放されようとしています。昨今の目覚ましい技術革新と世界の大手企業による大規模な取り組みが、ハード／ソフト両面の革新を促し、まさに産業界で躍進する体制が整ってきました。アディティブ・マニュファクチャリングについての最新技術や動向を学ぶとともに、グローバルでの先進事例や今後の展望について、理解を深めるとともに考究して行きます。

講演：「アディティブ・マニュファクチャリングによる新たな“ものづくり”」

講師：京極 秀樹 近畿大学工学部 ロボティクス学科教授

講演：「3DプリンティングにおけるEOS社の取り組み

～世界市場の動向と国内外の先進事例～」（仮題）

講師：前田 寿彦 株式会社NTTデータエンジニアリングシステムズアディティブ・マニュファクチャリング事業部

インタラクティブ・セッション

参加者：18 機関 26 名

第 26 回会合：10月 24 日（水）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「材料インフォマティクス～革新的材料開発と最先端技術～」

新素材や新たな合金の開発は産業を支える基盤であり、これまで理論と実験の積み重ねによって途方もない時間を費やして開発されてきました。しかも、元素の種類や量などの組み合わせは膨大にあり、目的に合った材料を開発することは非常に困難でした。そして今、コンピュータ科学の進展と人工知能の活用など情報科学の進化により、より効率的な材料開発を行なう材料インフォマティクスという取り組みが始まっています。第 4 の科学として材料開発を革新する材料インフォマティクスの動向と最新技術を学ぶことによって、産業界のみならず、我々を取り巻く社会や環境がどのように進化していくのか、理解を深めるとともに考究して行きます。

講演：「ケモインフォマティクス（※1）/マテリアルズインフォマティクス（※2）の現状と将来における展望」

講師：船津 公人 東京大学工学系研究科化学システム工学専攻教授

奈良先端科学技術大学院大学データ駆動型サイエンス創造センター研究ディレクター

講演：「人工知能技術を用いた新しい分子・物質の発見」

講師：津田 宏治 理化学研究所革新知能統合研究センター分子情報科学チームリーダー

東京大学新領域創成科学研究科情報生命科学専攻教授

インターラクティブ・セッション

参加者数：24 機関 34 名

※1：ケモインフォマティクスとは、コンピュータと情報化技術を用いて、化学領域の問題に適用する新しい方法論

※2：マテリアルズインフォマティクスとは、コンピュータと情報化技術を用いて、新素材を設計する新しい方法論

第 27 回会合：12 月 26 日（水）開催予定 於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「デジタル医療 第 4 次医療革命 Medicine 4.0」

サイバーフィジカルシステムによって医療を取り巻く環境を革新していくことで、診断や治療のあり方が大きく変わろうとしています。AI、IoT、ビッグデータを駆使することにより、AI による病気の傾向把握や診断支援、術式と術後の相関や手術室の可視化、電子カルテからの臨床経過予測、治療方法の共有など、これまで不可能とされてきたような統合的かつデータに基づいた医療のイノベーションを迎えようとしています。ビッグデータや AI がもたらす第 4 次医療革命とデジタル医療の先進事例や今後の方向性に触れて頂くことによって、新たなテクノロジーがどのように活かされ、医療を変革していくことが出来るのか、理解を深めるとともに考究して行きます。

講演：「第4次医療革命を実現するスマート治療室SCOT*」

講師：村垣 善浩 東京女子医科大学先端生命医科学研究所先端工学外科学分野教授

講演：「情報が変える医療・介護」

講師：中島 直樹 九州大学病院メディカル・インフォメーションセンター教授/センター長

インターラクティブ・セッション

参加者数：28 機関 42 名

*) SCOT (Smart Cyber Operating Theater) :

手術室でありながらメスを握る外科医の姿がかく、手術室とは思えないような洗練された空間となる。未来の外科医が腕をふるうのは“シアター型”的なサイバー空間。SCOT では、手術室内の医療機器をそれぞれの機能や役割に応じてパッケージ化。それらを「OPeLiNK (オペリンク)」と呼ぶシステムで統合し、手術室全体をネットワーク化する。

第 28 回会合：2019 年 1 月 23 日（水）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「エネルギー革命～発電と蓄電の未来～」

我が国では、太陽光発電を中心として再生可能エネルギーの大量導入が進みつつあり、電力需給調整や系統安定化にむけた大型蓄電池の研究や、ポスト FIT*を見据えた国民負担の低減に向けて革新的な低成本新構造太陽電池の実用化に向けた研究が進められています。次世代の電池技術の真髄を理解して頂くとともに、近い将来の再生可能エネルギーの動向を俯瞰し、太陽光発電や全固体電池等の次世代エネルギーによる社会の変革について、理解を深めるとともに考究して行きます。

*) FIT : Feed-in Tariff (固定価格買い取り制度)

エネルギーの買い取り価格を法律で定める方式の助成制度

地球温暖化への対策やエネルギー源の確保、環境汚染への対処などの一環として、主に再生可

能エネルギーの普及拡大と価格低減の目的で用いられる

講演：「再生可能エネルギー大量導入時代の到来～太陽光発電の新たな挑戦～」

講師：瀬川 浩司 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻教授

講演：「先進型二次電池による次世代のエネルギー変革」

講師：堀江 英明 慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科特任教授

インターネット・セッション

参加者：27機関 38名

第29回会合：2019年2月27日（水）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「次世代ハイパフォーマンスコンピューティング（HPC）」

科学技術の進歩は、時間の経過とともに次第にその速さを急激に増し続け、我々を取り巻く環境を劇的に進化させています。特にAI、IoT、ビッグデータの進展により、スーパーコンピュータは、これまでの高性能科学技術計算への利用に留まらず、爆発的に増え続けるビッグデータや人工知能の研究分野への応用も可能となってきました。次世代ハイパフォーマンスコンピューティングの最新技術動向や先進事例と今後の展望に触れて頂くことによって、新たなテクノロジーがどのように活かされ、社会や我々の生活が如何に革新していくのかについて、理解を深めるとともに考究して行きます。

講演：「ポストムーア時代に向けてAIやビッグデータ解析を加速する次世代HPC」

講師：松岡 聰 理化学研究所計算科学研究センターセンター長

講演：「これからの中規模シミュレーション技術における課題と期待」

講師：佐々木直哉 株式会社日立製作所研究開発グループ技師長

インターネット・セッション

参加者：27機関 50名

第30回会合：2019年3月27日（水）於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「機械と人の未来～しなやかなロボット開発と新たなAI研究～」

これまで科学技術の進化は、パワーと確実性を追い求め、確実な動作を求めて機械も材料も「かたさ」を追求してきました。近年、機械・電子、情報処理、材料科学等、複数の異なった分野で、生体システムが持つ「やわらかさ」を指向する新興学術が同時多発的に勃興してきています。

多分野との融合を図りながら、新たな発想により進められているソフトロボット学の研究とロボットに自らの認識とその発達ダイナミクスを持たせることで、人とコミュニケーションを可能としていく汎用人工知能に向けた研究を通して、人と機械の未来を議論します。

講演：「ソフトロボティクス～しなやかなロボット開発～」（仮題）

講師：鈴森 康一 東京工業大学工学院 教授

講演：「機械と人の未来～ロボティクスと人工知能～」

講師：谷口 忠大 立命館大学情報理工学部教授

パナソニック株式会社ビジネスイノベーション本部客員総括主
幹技師
インターラクティブ・セッション
参加者：35 機関 39 名

付属明細書 3

公益財団法人国際高等研究所
2018 年度（平成 30 年度）事業活動の展開
交流事業
「ジュニアセミナー」・「ゲーテの会」

1. IIAS 勉「ジュニアセミナー」

(1) 2018 年夏季ジュニアセミナー

2018 年度夏季ジュニアセミナー（通算第 6 回）を 8 月 8 日（水）、9 日（木）、10 日（金）の 2 泊 3 日の日程で開催した。「独立自尊の志」養成プログラムの趣旨である言語表現と身体表現の統合による全人教育の一環として天空の響きと銘打って「朗読」の時間を設け、2017 年夏季セミナーに続き、人間力の基礎の鍛錬に繋げる実践的カリキュラムとした。

受講生の募集対象府県を従来の京都、大阪、奈良の 3 府県に兵庫、滋賀、和歌山を加えた 2 府 4 県に拡大し、各々の各府県教育委員会の後援等の協力を仰ぎながら、多様な参加受講生の確保を図るための広報活動を行った。受講生は、京都府域 3 校 9 名、大阪府域 2 校 4 名、奈良県域 2 校 10 名、滋賀県域 1 校 1 名の計 24 名。（内訳は、男子 10 名、女子 14 名。また、3 年生 2 名、2 年生 11 名、1 年生 11 名。）

1) 思想・文学分野

講義：「太宰治『走れメロス』と夏目漱石『坊ちゃん』に学ぶ
～「友情」の光芒。その背景としての「政治」性～」

講師：田島 正樹 千葉大学文学部教授元教授

2) 政治・経済分野

講義：「西郷隆盛に学ぶ～人間、西郷隆盛に、「近代」を超えるよすが(拠)を探る～」

講師：先崎 彰容 日本大学危機管理学部教授

3) 科学・技術分野

講義：「関 孝和に学ぶ

～「文化」としての数学。「和算」に見る、その可能性と限界～」

講師：上野 健爾 四日市大学関孝和数学研究所長、京都大学名誉教授

4) 特別授業「朗読」

朗読家三岡康明先生の指導の下で、「天空の響き」と称しての「朗読」をテーマに体験学習を実施。自らの思いを言葉に乗せて相手に伝えることの意義について講話があり、また、難語早口言葉を活用して、あるいは自己紹介などを通じての発話訓練。発話による身体表現が、人間形成の上でも、また日常生活にあっても重要であることの一端を体験。貴重な学びの機会を提供した。

(2) 2019年春季ジュニアセミナー

2019年度春季ジュニアセミナー（通算第7回）を2019年3月23日（土）、24日（日）25日（月）の2泊3日の日程で開催することを決定し、第3四半期において受講生の公募を開始した。その結果、応募者多数となり、26名の受講生を決定した。

京都府域4校12名、大阪府域3校5名、奈良県域4校7名、滋賀県域1校2名 計12校26名。（内訳は、男子14名、女子12名。また、2年生18名、1年生8名。）

なお、「独立自尊の志」養成プログラムの趣旨である言語表現と身体表現の統合による全人教育の一環として特別授業を探究学習として時間を設け、2018年春季セミナーに続き、アクティブラーニングの手法の下に人間力の基礎の鍛錬に繋げる実践的カリキュラムとした。

1) 思想・文学分野

講義：内村鑑三に学ぶ～今に光彩を放つ「明治の精神」

～台木としての「武士道」、接木としての「基督教」～

講師：新保 祐司 都留文科大学理事・副学長・教授、文芸批評家

2) 政治・経済分野

講義：渋沢栄一・五代友厚に学ぶ

～経済は道徳に不可欠であり、道徳は経済に不可欠である。～

講師：宮本 又郎 大阪大学名誉教授

3) 科学・技術分野

講義：緒方洪庵に学ぶ～唯おのれを捨てて 人を救わんことを希うべし～

講師：木下タロウ 大阪大学微生物病研究所黒本難病解明寄附研究部門教授

4) 特別授業「探究学習（アクティブラーニング）」

本セミナーの開催の背景として、「人間力の基礎をなす哲学（理性）と演劇（感性）によって鍛えられた「独立自尊の志」を有する「全人」が求められること」が掲げられている。それに応えるための試みとして、アクティブラーニングの手法の下に、「『森のねんど』の物語」にかかる創作活動の世界を体験し、「想いを形にする」を通じて「感性」を鍛える契機とした。

岡本道康氏（人形作家・森のねんど研究所代表）の指導で、ミニジオラマを共同創作。さらに、共同創作の班分け、その体験に関する省察を、村上忠幸先生（京都教育大学）のご指導の下に「マルチプルインテリゼンス（多重知能）理論をベースに行った。

(3) けいはんな文化学術教育懇談会

「IIAS塾ジュニアセミナー」のこれまでの開催経過等を振り返りながら、「独立自尊の志」を有する「全人」の輩出を願いつつ、関西の若者の教育力の涵養、あるいは日本の未来を担う人物の輩出の在り方などについて意見交換するために、「けいはんな文化学術教育懇談会」の2017年度に引き続き8月23日（木）にキャンパスプラザ京都にて開催した。

出席者は、呼びかけ人となった猪木武徳、佐伯啓思、高橋義人の各先生の他、ジュニアセミナー講師陣、受講生を推薦した実績のある高等学校長、大学院生（TA）他、

過年度の受講生等 19 名。それぞれの知見を披瀝し、今後の「学びの場」の在り方などについて意見交換した。

意見交換では、IIAS 塾には、学校教育では望みえない、生徒の多様な好奇心に幅広く応えた学びのプログラムを望みたい。本来「引き出す」という意味の education に「教育」という言葉を当てたことで、明治以来、日本の教育の在り方に混迷を來したことに目を向けるべきである。IIAS 塾での講師の役割は、本質的には小さく、大きいのは受講生の、ある種の「社交力」である。受講生がお互いに意見交換し、刺激し合い、成長していく姿こそが本来の学びの姿であり、それが実現できているのは素晴らしいことである。脳科学、心理学の観点から言えば、IIAS 塾などでは、「Society5.0」の先を見通したヒューマンセントリック（人間中心）なアナログ性を視野に置いた学びに向かい合うべきではないか等の議論が交わされた。

2. 「ゲーテの会」

高等研の知的資源と人的ネットワークを活用して、知的連携の促進とそのための土壌醸成を図ることを目的として、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ“ゲーテの会”」を2013年度に立ち上げ、原則として毎月の満月の夜に公開セミナーを企画・開催している。

現在では、けいはんな学研都市に立地する法人や企業の関係者、近隣住民など、広く一般を対象とし、一般企画では40名程度を上限として参加者を募っている。リピーターも増え、人的ネットワークに基づいて京都市内や大阪市内など、より広範囲の地域からの参加者も認められるようになった。

2018 年度のゲーテの会は、2017 年度に引き続き日本の「未来社会」を拓くことに視点を置いて、「未来に向かう英知を探る：時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか」を主テーマとして毎回の通常企画を展開した上、最後に 2018 年度に繋がる特別企画を開催した。2018 年度は 12 回の定例開催により延べ 467 名の参加者を得て、1 回当たりでは平均 39 名と安定した活動実績を示した。

第 58 回：4 月 27 日（金）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：政治経済分野

講演：「未完」の西郷隆盛～日本人はなぜ、論じ続けるのか～

講師：先崎 彰容 日本大学危機管理学部教授（日本思想史、日本倫理思想史）

内容：

「明治維新 150 年」の 2018 年になぜ注目するか。それは現在の私たちが生きる時空間=近代日本 150 年の水源地だからである。なかでも、近代という漠然とした言葉に血肉を与えてくれるのが「西郷隆盛」である。西郷は、明治 10 年の西南戦争直後から、さまざまな思想家を喚起し、自分の考えを語る際の源泉となってきた。福澤諭吉など同時代人はもちろん、戦後の三島由紀夫なども西郷をダシに自分の思いを語った。西郷を知ることは、近代日本 150 年を知ることである—「未完」の西郷隆盛から、2018 年を知る手助けをする。

参加者：36 名

第 59 回：5 月 29 日（火）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：思想文学分野

講演：江戸と京に遊ぶ～日本美の探究者・九鬼周三

講師：藤田 正勝 京都大学名誉教授（ドイツ哲学、思想史、日本哲学史）

内容：

九鬼周造は『「いき」の構造』や『偶然性の問題』、『人間と実存』などの著作で知られる哲学者。1921年から8年にわたってドイツ・フランスに留学して、1929年に帰国し、京都大学で西洋哲学史を担当した。当時最先端であったベルクソンやハイデガーなどの哲学を紹介し、日本における実存哲学やフランス哲学の研究の礎を置いた人物である。

九鬼には『文芸論』という著作もあるが、芸術や文芸にも深い理解を有した人であった。九鬼自身が「美の世界に生きた人」であったと言える。自ら数多くの短歌や詩を作り、日本の伝統的な音楽、特に長唄や小唄、清元などを愛してやまない人であった。さらに晩年には京都・山科の地に粹をこらした邸宅を構えたことでも知られる。江戸時代を代表する美意識とも言うべき「いき（粹）」に深い関心を寄せ、それをめぐって精緻な分析を行い、その構造を鮮やかに描きだした。本講演では九鬼の「美」の理解、彼の「美の世界」をテーマにとり上げ、特にその「いき」の理解に焦点を当て、「いき」とは何か、九鬼はなぜ「いき」を問題にしたのかについて考える。

参加者：40名

第 60 回：6 月 28 日（木）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：科学技術分野

講演：日本近代化の立役者たちを輩出した適塾「緒方洪庵」の志

講師：木下タロウ 大阪大学微生物病研究所寄附研究部門教授（免疫学・生化学）

内容：

緒方洪庵（1810-1863）は幕末の大坂において蘭学塾である適塾を主宰した。20 数年間に学んだ塾生は 1,000 人を数え、橋本左内、大村益次郎、福沢諭吉、長与専斎、佐野常民ら歴史に名を残す多くの人物を輩出した。洪庵は蘭学を通じてヨーロッパの最新医学を伝えるとともに、当時深刻な感染症であった天然痘の予防事業を関西一円で精力的に行って大きな成果を挙げた。これは幕府の認めるところとなり、奥医師そして西洋医学所頭取として召し出されたが、病を得て翌年に江戸で没した。適塾での教育は、洪庵が直接教えるというより、オランダ語の原書を、辞書を頼りに読み込んだ塾生同士が、議論して学び取るという形であった。切磋琢磨して合理的な考え方を身につけた塾生の中から、医学を超えて日本の近代化に貢献した人たちが育ったと思われる。本講演では、社会の胎動期に生きた洪庵の生涯から見えるものを考える。

参加者：38名

第 61 回：7 月 27 日（金）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：政治・経済分野

講演：『菊と刀』にこと寄せて「民主主義」の行方を考える。

～公共政策規範としての「将来世代に対する責任」～

講師：足立 幸男 京都大学名誉教授（公共政策学）

内容：

「将来世代に対する責任」というコトバは今日各界のリーダーが好んで口にするものの一つであるが、それがはたして単なるコトバ以上の「生ける倫理」として定着し現実の公共政策に体現されるようになったかといえば、極めて疑わしい。民主主義の正規の手続きに則って堂々と将来世代の福利に致命的打撃を与えるかねない「近視眼的」政策が繰り返し採択されているからである。自然への畏敬の念を抱き、先行世代から受けた恩義を後続世代への配慮という形で返すことを要求する恩の倫理を大切にし、周囲を顧みず己一人の本能と欲望の赴くままに生きるがごときは畜生道に他ならない、また「末代までの恥」になるような行いだけは何としてでも避けねばならないと諭す教えが忘れ去られてしまった今日、将来世代への責任の倫理をどうすれば蘇らせることができるか。どのような制度の新規導入が将来世代の福利に配慮した政策の選択・実施の可能性を高めることが出来るのかを考える。

参加者：31名

第 62 回：8 月 27 日（月）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：政治・経済分野

講演：荒廃農村地域の再生に生涯をかけた「二宮尊徳」の信念と信仰

講師：鎌田 東二 京都大学名誉教授（宗教哲学・民俗学・日本思想史・比較文明学）

内容：

二宮金次郎（1787 - 1856）は「災害の子」である。天明大飢饉の渦中に生れ、天保大飢饉を生き抜き、安政 3 年に死去した。子供の頃、酒匂川（神奈川県小田原市）の氾濫で家と田畠を失い、14 歳で父親、16 歳で母親を亡くし、一家離散の憂き目を見た。だが、その困窮の中で、家を復興し、村（栢山村）を復興し、藩（小田原藩）を復興し、幕府領の復興をも果たした。ある夏前に茄子の味が秋の味になっているので、その夏が冷夏となることを予知し、粟や稗を植えて備えをしたら、天保の大飢饉となった。茄子の味一つで天保の大飢饉を予知し、適切な対策を講じて被害を最小に食い止め、小田原藩では餓死者を一人も出さなかったという。その鋭い観察と経験によって正確に災害や災難（天災・人災）を予測し、それに明確な対策を立てて実行に移し、人々の苦難を救った。その二宮尊徳の人生と行動と信仰は未来へのさまざまなヒントとメッセージを秘める。

参加者：38名

第 63 回：9 月 26 日（水）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：芸術・音楽分野

講演：岡本太郎はいま、再発見されようとしている

講師：赤坂憲雄 學習院大学教授、福島県立博物館館長（東北文化論・日本思想史）

内容：

私は生前の岡本太郎を知らない。興味がなかった。亡くなつてから、出会つたのである。その東北文化論を読んで、衝撃を受けた。そこには、はるかな1960年代に、わたし自身の東北学が先取りされていた。そればかりではない。岡本太郎はまさに、グローバル化してゆく世界の中に、ローカルな泥にまみれて立つための知や技や覚悟のあり方を示していた。伝統こそが創造の現場である、といった言葉の秘める挑発と励ましにも心を打たれる。大阪の万博跡地に、いまも立ち尽くす太陽の塔を仲立ちとして、わたしたちはいま、岡本太郎を再発見しようとしているに違いない。

参加者：36名

第64回：10月23日（火）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：思想・文学分野

講演：島崎藤村が描いた「夜明け前」の日本

講師：猪木 武徳 大阪大学名誉教授（労働経済学）

内容：

島崎藤村の『夜明け前』は、幕末の黒船出現から明治中期までの日本を、木曾路・馬籠宿の本陣、問屋、庄屋を務めた青山半蔵（藤村の実父）と周辺人物たちの思想と行動を通して描いた大作である。特に第一部は、脇本陣、年寄役の「大黒屋」大脇兵右衛門信興が40年以上にわたって書き続けた日記を主に用いて、幕末期の日本の社会状況と人々の経済生活を具体的に書き留めた点を特徴としている。本講演では、この大作の中から主要人物を取り上げて、経済活動と宗教（国学と神道）の問題、過激派思想の動き、神仏同体説などに焦点を当てつつ、「御一新」と「明治維新」が近代日本社会に何をもたらしたのかを考える。

参加者：33名

第65回：11月22日（木）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：科学・技術分野

講演：日本の医学発展の礎を築いた「北里柴三郎」の大生涯

講師：森 孝之 学校法人北里研究所北里柴三郎記念室次長・特任講師（医学）

内容：

今から120年前の日本人の平均寿命は男性42.8歳、女性44.3歳であった。劣悪な栄養状況、衛生環境の不備、そして貧困あるいは教育の欠如などに加え、致死率の高い感染症の蔓延も要因の一つであった。「衛生行政の立ち後れと学問知識の未熟さゆえに毎年、何万人という尊い命が伝染病で失われていく。これで文明国といえるのか」と近代国家を目指す日本の盲点を指摘した北里柴三郎は伝染病研究所を創設した。ベルリン大学ローベルト・コッホ博士から病原細菌学を学んだ彼は医薬品や予防治療法の研究・開発を推進した。一方では関連法案の制定に参画すると共に衛生思想の普及にも努めた。北里が掲げた近代日本医学の在り方とは何かを考える。

参加者：20名

第 66 回：12 月 21 日（金）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：政治・経済分野

講演：大正デモクラシーの立役者「吉野作造」が描く日本の針路

講師：奈良岡 聰智 京都大学教授（日本近代政治外交史）

内容：

吉野作造は、「民本主義」を提唱し、大正デモクラシーをリードした言論人として知られるが、歴史研究者でもあった。吉野は元々東京帝国大学法学部で政治史講座を担当し、ヨーロッパや中国の政治を研究していたが、大正末期になると明治文化研究会を組織し、明治憲政史の研究に力を注ぐようになった。彼は、わが国における明治史研究の草分けでもあった。

実は吉野が明治史研究を始めた背景には、明治を回顧・顕彰しようという全国的な風潮が影響していた。このような動きは、明治天皇の崩御、「明治 50 年」などを経て、昭和 3 年の「明治 60 年」に一つの頂点を迎えた。この年の干支が、戊辰戦争以来の「戊辰」であったことも影響していた。この時期の明治ブームは、形を変えて戦後の「明治 100 年」「明治 150 年」にも受け継がれていくことにもなった。

本講演では、吉野の明治史研究を端緒としつつ、これまで節目ごとに明治維新がどのように捉えられ、顕彰されてきたかを検討する。2018 年は「明治 150 年」に当たり、さまざまな関連行事が行われたが、その意義についても考える。

参加者：24 名

第 67 回：2019 年 1 月 24 日（木）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：思想・文学分野

講演：明治維新 150 年の功罪—女性の変化を中心に

講師：佐伯 順子 同志社大学教授（比較文化学）

内容：

明治維新（戊辰）150 年を過ぎ、日本の近代化過程をふりかえる議論が高まつた。江戸から明治への「文明開化」期は、社会制度から市民生活に至るまで多くの「改良」ブームが巻き起こり、日本の歴史上の大きな変革期であった。

但し、当時の「改良」が実質「改悪」であった面もあり、明治以降の女子教育は、男女「対等」を理想に掲げながらも、実質的に、女性の役割を家事育児に限定することで、生産労働から女性を疎外した。現在、日本のジェンダー・ギャップ・インデックスが 110 位（世界経済フォーラム、2018 年 12 月発表、2017 年は 114 位）であり、「女性活躍」という掛け声とは裏腹に、大学医学部入試における女性差別という深刻な問題が明るみに出たのも、遡れば明治の近代化に遠因がある。「明治維新」がもたらした功罪と、その現代日本社会への影響を、明治大正期の新聞・雑誌メディアの情報から考え、一緒に未来に向けた課題解決の可能性を探る。

参加者 33 名

第 68 回：2 月 20 日（水）於国際高等研究所コミュニティホール

分野：科学・技術分野

講演：江戸のダ・ヴィンチ、司馬江漢

講師：池内 了 総合研究大学院大学名誉教授（宇宙物理学）

内容：

私は、かつて『科学のこれまで 科学のこれから』という短い本を書いた（岩波ブックレット）。これまでの 100 年の間の科学の「異様な」発達を見ながら、これからの 100 年先の科学の行き方について書いたもので、そこでは「「文化」としての科学」の典型として博物学を取り上げた。

ゲーテの会で話題にするのは司馬江漢である。彼は日本画の屈指の画家だが、日本で最初にエッチング技術を取り入れた上に洋画にも手を出し、さらに科学では地動説を唱導し宇宙論へも踏み入っている。当時の天文学は暦学に終始して宇宙の構造には関心がなかったが、江漢はまさに博物学的好奇心を發揮して窮理学に、天文学に造詣を深めた。また、同時代の山片蟠桃は金貸しの番頭でありながら、人間が宇宙のあちこちに生きるとする宇宙像を展開している。

自分の専門の職業でちゃんとした仕事をした上に、科学の素人でありながら宇宙に関心を持った江漢（や蟠桃）の生き様を振り返りながら、なぜ江戸時代に博物学が隆盛であったのかを考える。

参加者：38 名

第 69 回特別企画：3 月 19 日（火）於国際高等研究所レクチャーホール

分野：芸術・音楽分野

講演：アメリカ大統領とハリウッド～政治と文化（映画）の関係を探る～

講師：村田 晃嗣 同志社大学法学部教授（国際政治学）

内容：

- ① 政治史（社会科学）と映画史（人文科学）との架橋による現実社会の把握の新たな視点を学ぶ。
- ② 日本における政治とアメリにおける政治との基本的差異を映画文化の成立過程を通じて照らし出す。
- ③ 特に、映画と戦争と民主主義をテーマに、アメリカの政治と日本の政治の今後のあり方を考える。

参加者：66 名

地球環境問題解決に向けた京都メッセージ

人類は、地球の温暖化や最新の科学技術が生み出した物資の環境負荷への対応等、持続的生存が脅かされそうな課題に直面しています。こうした課題に対応するためには、世界が共有できる価値観の創造やライフスタイルの確立が求められており、経済発展の違いなどを乗り越え、確かな未来を次世代に残していくことが必要です。

そうした中で、国連の名のもとに集った国々が、満場一致で地球温暖化対策の新しい枠組みである「パリ協定」を採択しました。国際社会は、各国の利害、途上国と先進国との意見の相違を乗り越えて新たな一步を踏み出し、すべての国がそれぞれに異なるアプローチを取りながらも、共通の目標に向けて貢献し、地球環境を守りながら前へ進むことを決めたのです。

国際的な枠組みが整った今、地球環境問題は、世界の人々がこれまで以上に各地域で具体的な行動を行い、持続可能な開発に資する地域づくりに取り組む時代に入りました。そして、活動を支える発想や方策はその地域にとどまらず、広く世界各地で共有・応用していくことが求められています。また、こうした活動から得られた「人類の英知」を音楽など誰もが理解できる方法で次世代に伝え、活動を未来に繋げることが求められています。

「持続可能な開発」が提唱されて早30年、未だ解決策を探し続けている人類にとって、地域に内在する英知を磨き出すことは大きな使命です。たとえば、人間を自然の一部と捉え、自然との共生の文化を育んできた日本的な発想はその方向性に光を与えてくれるでしょう。

「京都議定書」誕生の地・京都の南端に位置し、人類の未来と幸福に資する根源的な課題解決の方途を学際的に探求する国際高等研究所は、「KYOTO地球環境の殿堂」の第10回殿堂入り者の諸兄姉とともに、思想や文化の垣根を越えた、地球規模の発想に根ざす様々な活動を展開し、人類生存の持続可能性へ向けての新たな道筋を明らかにする役割を果たします。人工知能が駆動する第4次産業革命は、人類生存の持続可能性に貢献すると同時に、それを脅かす負の効果をもたらしています。現在進行中の技術革新が持続可能な開発に多大の貢献を果たせるよう、社会経済システムを再編成する方策、及び科学技術、人材育成のあり方の探求に、積極的に取り組むことを誓います。

2019年2月9日

前国連気候変動枠組条約事務局長
クリスティアナ・フィゲレス

公益財団法人国際高等研究所 所長 松本紘

宗教学者 山折哲雄

歌手/環境保全活動家 エゴ・レモス

Kyoto Message for Preservation of Global Environment

Human beings are faced with a challenge that is likely to threaten their sustainable survival, such as global warming and the environmental impact of materials necessitated in the modern life seeking convenience and comfort. In order to respond to these challenges, it is necessary to create a sense of values that the world can share and to establish a lifestyle, to overcome the differences in economic development and to leave a certain future for the next generation,

Under these circumstances, on the 12th of December in 2015 the Conference of Parties of the United Nations Framework Convention on Climate Change unanimously adopted the Paris Agreement, a new framework for global warming countermeasures. While the international community is taking steps forward by overcoming the conflict among each country's interests and the disagreement between developing and developed countries, and all countries are exploring different approaches, we have made the decision to jointly contribute to common goals and move forward toward preservation of the global environment.

Now with the international framework in place, global environmental issues have entered an era in which people around the world more than ever are taking concrete action in their regions and contributing to regional sustainable development. Ideas and policies that support activities are not limited to the area they originate, but are required to be shared and applied all over the world. The hope is to be able to convey the wisdom of mankind obtained from these movements to the next generation through music and other media, so that everyone can understand and connect these activities to the future.

For human beings, who have been searching for solutions for the last thirty years since the idea of "sustainable development" was proposed, it is a great mission to refine the wisdom inherent within each community. For example, the Japanese idea of treating human beings as a part of nature and fostering a culture of symbiosis with nature can surely shine a light in that direction.

In Kyoto, the birthplace of the Kyoto Protocol, the International Institute for Advanced Studies locating in southern part of the prefecture, explores the fundamental problem-solving necessary for the future and happiness of human beings. The Institute hereby declares, together with the inductees of the 10th "Earth Hall of Fame Kyoto", to contribute to the role of working on sustainable development through various activities beyond the barriers of thought and culture, consequently, we declare to open up a new path toward sustainability of human survival. The 4th industrial revolution driven by technological innovation such as artificial intelligence is expected to contribute to as well as threaten sustainability of human survival. We sincerely swear to investigate the most appropriate reorganization of the existing socio-economic system including technological innovation and capacity building so that the 4th industrial revolution in progress be a major contributor to sustainable development.

February 9, 2019



Christiana Figueres

Diplomat/Former Executive Secretary of the UN
Framework Convention on Climate Change



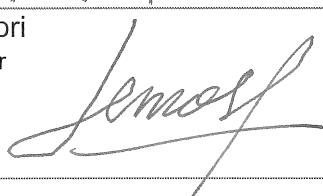
Hiroshi Matsumoto

Director
International Institute for Advanced Studies



Tetsuo Yamaori

Religious Scholar



Ego Lemos

Singer/Environmentalist